

《解説》

宮下遼

作者ラティフェ・テキン(Cafite Tekin)は一九五七年生まれ、カイセリ県出身の女性作家である。九歳のときに両親と共にイスタンブルへ移住、ベシクタシユ女子高校を卒業後、二十六歳のときに処女作『愛すべき恥知らずの死』(Sevgili Arsz Ölümlü 一九八三年)を上梓している。処女作はアナトリアの農村の生活を、現実と幻想が混ざり合い、ときにグロテスクな寓意が織り交ぜられたラテン・アメリカ文学的な筆致で描き出し、それまで農村の苛酷な現実や社会矛盾に焦点を当ててきた農村小説とは一線を画する作品として、一躍脚光を浴びた。以降は脚本一編、回想録一編を含む、十作品を上梓し、ほぼ同世代のパムク(Oshan Pamuk 一九五二年)やトプタシユ(Hazan Ali Toprak 一九五八年)などと並んでトルコ・モダニズムの代表的作家として認知されるに至る。

ただし、人間の不条理な精神の機微を主軸に据えつつ徐々に前衛小説へ傾倒し、現在トルコを代表する女性作家となったシャファク(Eli Sifak 一九七一年)などに大きな影響を与えたトプタシユや、東洋と西洋

の文化的相克、あるいは七〇年代のモダニズム作家たちの問題意識を受け継ぎつつ都市の知識階層の思想的孤独を扱い、トルコの社会思想的な側面へと深化したパムクが、ともに政治や国内の社会問題のような足元の出来事とは一定の距離を置き、非社会派小説とも呼ぶべき作品を上梓してきたのとは対照的に、テキンは五十年代以来、長らくトルコ小説の主たる関心事の一つであった「貧困」を一貫して扱い、今日なお「社会の翻訳者」を自任しつつ、積極的にトルコ社会を描く社会派作家である点には留意が必要である。

今回、ここに一部を訳出した『乳搾りクリスティンのゴミのおとぎ話』は、『愛すべき恥知らずの死』発表の翌年、一九八四年に出版された二作目の小説作品であり、その後の彼女の「貧困」という問題意識を決定づけた作品として、処女作と並んで他にも認める代表作となっている。

舞台はトルコのいづれとも知れない、工場の立ち並ぶ都市の郊外にできたゴミの山、農村からやって来た移住者たちが築いた一夜建て(Geçerdu)の街(花の丘)である。一夜建てとは「夜」(Gece)、「置いた」(Koydu)を原義とし、農村から都市部に流入した人々

が、郊外の公用地などに夜間にまぎれて不法に建てた掘っ立て小屋、ないしそれらが寄り集まったスラムを指す。今回の訳出に当たっては新井政美氏の訳語に従いつつ「一夜建て」とした。

産業廃棄物に埋もれた丘の上に、ゴミを建材として築かれたこの一夜建ての街そのものを主人公として、その誕生から終焉を描き出すのが本作『乳搾りのクリスティンのゴミのおとぎ話』である。本作でテキンは、都市郊外の貧民街をゴミと産業廃棄物に埋め尽くされた異界として描き出す一方で、五〇年代から七〇年代に隆盛を極めたトルコ農村小説の骨子ともいえる抑圧者による搾取や、都市人とは異なる農村的価値観といった要素を引き継ぎつつ、農村的事物(魔除け、まじない、聖者崇拜、キリム、松明、そして民謡等)を都市の産業廃棄物(ブリキ缶、ガラス瓶、大量生産品の皿、プラスチック、ナイロン等)と対比させ、人間の象徴としても機能させている。また、本来は農村的な行為である「乳搾り」が、本作においてはゴミの山へ行ってめぼしい物を拾い集めてくる娘たちに与えられた呼び名であるという一事は、テキンが「花の丘」というスラムを都市の中の新たな農村として再発見した

ことを示唆するようでもある。

現在でこそトルコ・モダニズム文学の代表的作家の一人に数えられるテクンだが、貧困という問題についての強い傾倒や、ときに社会主義的とも思われる思想的傾向といった農村小説家たちの遺産を継承した点では、正統的社会派作家とも位置付けられるかもしれない。

さて、本書には章題どころか、章番号さえ付されていないが——改頁によっておおよその章分けはなされている——今回訳出したのは冒頭の二章分に当たり、便宜上の章番号を付した。簡明な、それこそおとぎ話のような簡素な文体で幕を開ける本書であるが、牧歌的な語り口とは裏腹に、赤ん坊がたやすく命を絶たれ、あるいは都市にあってなお雨風という自然の脅威にさらされ、赤貧に喘ぎ、病に倒れ、公害毒に冒され、ときに人間らしい風貌さえ損なっていく住人たち様子は悲惨そのものであり、淡々とした語りがその悲哀を浮き立たせるようでもある。物語はこのあと、〈花の丘〉で巻き起こるさまざまな難題や外部からの抑圧、搾取、国家権力の介入といった数々の苦難を経つつ、遅々とした歩みで、しかし着実に発展し、やがて都市の中の農村／

異界からまがうことなき都市の一部へ同化していくこととなる。しかし、本書の掉尾に至るまで〈花の丘〉の住人たちの生への強い意思は保たれ続けるのである。

いまなお、一夜建てのスラムが都市郊外に立ち並ぶトルコの現状を思えば、都市の貧困の限界点において、ただ生きるということそれ自体に伴う困難の痛切さや、それに打ち勝とうとする〈花の丘〉の住人たちの

生への欲求の崇高さを描き出した本作は、発表されて二十年を経たいまでも読む者の胸を打って止まない名作と言えるだろう。



アンカラの一夜建て